

# 沙石集における叡山仏教

渡 辺 守 順

## 一 序

尾張国木賀崎長母寺の開山、無住国師が書いた沙石集はその序によれば「弘安第二之曆、三伏夏之天、集之」とあるから、弘安二年（一二七九）に書き始められ、弘安六年（一二八三）に完成した。つまり、作者無住が五四歳から五八歳にかけて、約五カ年かかつてまとめたものである。諸本はじつに多いが、渡辺綱也『広本沙石集』（日本書房）、築土鈴寛『沙石集上下』（岩波書店）、岩波日本古典文学大系『沙石集』などが信頼できる普及本となつてゐる。ここではお茶の水図書館蔵梵舜本（慶長二年書写）と、市立米沢図書館蔵本（興譲館旧蔵本）を底本とした岩波日本古典文学大系の『沙石集』によつて、叡山の仏教がどのような姿でこの説活文学の中に存在しているかを調査し、沙石集と叡山仏教とのかわりあいを見明らかにし、沙石集の正しい理解を助け、あわせて、比叡山天台仏教の文学における意義を再認識したい。すでに、今

昔物語集では六二八話中一一八話約一七%、宇拾遺物語は一  
一九七話中六一話約三一%、古今著聞集は七二六話中一四二  
話約二〇%などの実態について述べた。本稿では沙石集の一  
五六話中四八話約三〇%の実態を舞台、人物、教学に分けて  
整理し、沙石集における叡山説話の特色を分析したい。ま  
ず、各巻ごとの分布状況を示すとつぎのようである。各巻の  
（ ）内はその巻の叡山関係説話数である。

巻一—一〇（五） 巻二—一〇（四） 巻三—一八（三） 巻四—九  
（三） 巻五—一三（一一） 巻六—一八（九） 巻七—二五（二）  
巻八—一三（三） 巻九—一三（二） 巻一〇—一七（七） 計一  
五六（四八）

右のうち、とくに多い巻一は神祇、巻五は円頓学と釈教  
歌、巻六は説経となつてゐる。

## 二 叡山関係説話の実態

①舞台 説話の中にでてくる叡山に關係する地名を巻ごと

に列記すると次のようである。

巻一（吉野・日吉・山門・山・西坂本・北嶺・東塔）（三井寺・日吉大宮）

巻二（横倉）（竜泉寺・天王寺）

巻三（地名無）（高山寺）

巻四（大原・山・西坂本）（三井）

巻五（日吉・山・三塔・大原）（大宮・三井寺・大講堂）

巻六（山）（六角堂）

巻七（地名無）（善光寺・三井寺）

巻八（山）（天王寺・平等院）

巻十（比良・横川）（三井・横川坊・国清寺）

右の地名・寺名・坊名は『今昔物語集』『宇治拾遺物語』『古今著聞集』などに比較すると、やや少ない。しかも、延暦寺とか、比叡山の文字が非常に少なくなっている。時代のせいであることと、今昔、宇治等が叡山の直接息のかかった作者・編者によつてまとめられたものであるのに対し、無住が文献によつて、間接的に伝承的に採集し編集した説話集であることが原因であろう。

②人物 舞台と同じく巻ごとに列記する。

巻一（公歎僧正・智者大師・慈恵僧正・役ノ小角・恵心僧都・桓舜僧都・宝地房証真・北嶺学侶・東塔北谷食僧）

巻二（大師ノ円仁・山僧・恵心僧都）

巻三（恵心僧都・聖一和尚）

巻四（延寿・三井大阿闍梨慶祚・小原僧正・座主僧正・明禅法印・松尾証月房・天台祖師・荆溪・天台大師・顕真僧正）

巻五（山門学者・天台大師・南岳・天台学者・山僧・天台・教月房法橋・恵心僧都・三井寺法師・良暹・顕昭・慈鎮）

巻六（天台大師・聖覚・慈恵大師・山法師）

巻七（実相房上人ノ頼豪）

巻八（山僧）

巻十（恵心僧都・聖覚・都率僧都覚超・智者大師・智証・伝教・慈覚・源信僧都）

右の人物グループを見ると、中国天台・日本天台の源流・天台浄土教の三分野の人々がほぼ平均に登場し、無住の思想を論ずる場合の重要な鍵となる。天台に関する学問はつぎに考察する教学の面によくあらわれているが、それが天台の人物系譜の上からも実証できる。

### 三 叡山説話の特色

つぎに、沙石集における叡山関係説話の特色を教学の方面から少し述べたい。無住の教学として論ずる場合、説話に引用された経典はじつに多い。かつて発表した「沙石集研究ノオト」より概略を列記しよう。

梵網経 心経 肇論 宝蔵論 摩訶止観 不増不減経 心地観経  
円覚経 唯識論 観経 往生要集 法華経 十輪経 六波羅密  
経 撰択集 利益経 陀羅尼経 涅槃経 大集経 金剛経 摩訶

止観 大智論 菩提心論 首楞嚴經 百喻經 安樂集 遺教經  
 淨名經 宗鏡錄 法句經 小品經 文珠問經 法華三昧經 像法  
 決疑經 勝鬘智論 正法眼藏 仏頂經 仁王經 守護經 大日經  
 起信論 金剛般若經 大集經 如法經 寶藏論 維摩經 弥陀  
 思維經 興禪護國論 金鈔論 撰大乘論 占察經 賢愚經 宝輪  
 論

右はすべての書名が正しい表記でないが原文のまま引用した。再出のものは重複するのさけたが、かなり頻度数も多く広範囲に及んでいることは事実である。無住の仏教の幅の広さに驚くとともに、沙石集の説話の特色といえる。

さて、叡山の教学の影響をうけている本文について考察してみたい。

まず、はじめに指摘したいのは巻一の「大神宮の御事」にてくる「本地垂跡」の思想である。これは『神道名目抄』に「伝教弘法両僧始めてこれを始めらる」とある。また、巻一の「神明慈悲ヲ貴給事」の中でも「余二和光同塵」とあり、叡山の神仏習合の思想を強く述べている。

第二には「摩訶止観」の引用が目立つ。巻一の「出離を神明に祈る事」の中では「摩訶止観、天台ノ心ナラバ、性具ノ三千十界ノ依正、皆法身所具ノ万徳ナレバ、性徳ノ十界ヲ修得ニアラハシテ善現色身ノ誓ヲ以テ、九界ノ迷情ヲ度ス」とか、「止観ト云ハ、高尚ノ者ハ高尚シ、卑劣ノ者ハ卑劣セン、

古徳ノ曰ク、阿鼻ノ依正ノ全ク極聖ノ自心ニ処シ、毘盧ノ身土ハ、凡下ノ一念ヲ踰ズ」とか、巻四の「無言上人の事」の中では「摩訶止観第三ノ釈、天台ノ御臨終ニ、観経、法華、首題ヲ御弟子ニ唱ヘシメ」とあり、さらに、同じ巻の「道心タラン人執心ノゾクベキ事」の中には「止観談義、止観ノ法門ハ承又、止観一部ハ皆心エツ」とある。巻五の「円頓学者鬼病免タル事」の中では「円頓者、初縁実相、三種ノ止観ヲ伝ヘ給事ノ中ノ円頓止観ノ文也」とある。これらはほんの一部の引用にとどまるが、止観を重視していることがわかる。

第三には天台の一乗教にふれ、巻二の「仏舍利感得シタル人ノ事」では「大乘の仏教」とあり、同じ巻の「薬師観音利益事」では「一乘弥陀観音有縁ノ国也」とある。また、巻四の「無言上人の事」の中では「天台ハ一ヲ執シテ」「天台ノ内鑑冷然ノ御釈二其ノ意釈タリ 天台ハ四教ヲ立テ、天台ハ一ヲ執ス」と述べている。

このほか断片的にとらえると、巻三の「禪師ノ問答是非の事」の中で「天台禪門ノ観心」を述べ、同じ巻の「梅尾上人の物語の事」では「天台ノ御詞、玄義中ニ侍ル」と天台法華三大部を引用し、さらに「一念三千」については巻五の「哀傷の歌の事」、巻六の「嵯峨の説法の事」、同巻の「有所得の説法の事」などで詳説している。また、「往生要集」、「法華

八講」についても注目すべき記述がある。

以上紙数の都合できわめて簡略な指摘に終つたが、沙石集の説話における叡山教学がかなり濃厚な形で内在していることがわかる。

#### 四 結

無住の思想を沙石集の説話から考察した先学の研究によると、通仏教であるといわれ、とくに天台教学だけに特別の関心を示したとはいえない。このことは無住が説話の蒐集に異常な努力をし、広範囲から入手したものを取捨撰択したこと

になる。さらにこのことを深く考察すると、叡山仏教が全国的に文献的と口承的とを問わず、多くの説話に浸透していたと考えてよい。このように考えると、沙石集の三〇%の密度は注目すべきであろう。ただ、叡山仏教の影響に感心するだけでなく、仏道に導く手段方法として説話ないし文芸を「狂言綺語」とさげすみながら、「陀羅尼和歌」論をぶつあたり、じつに説話を限りなく愛着し、その価値を高く認めている事実をはつきり認識するのである。されば、沙石集の文芸性を追求し、思想性を再評価して、地名、人名、引用文献のまことに豊富な内容を改めて知るとともに、無住のさりげない表現の中に含まれた作者の人間臭に拍手を送りたい。

近年とくに、大学入試などでもとりあげられ、ごく一部で

はあるが関心をもつ人口が増えつつある。沙石集の正しい理解は天台教学、とくに日本の叡山仏教の知識なくしては果しえない部分が多い。本稿では地名、寺名、坊名等の地理的考察も省略してただ列記したに終つた。また、人名も、座主、高僧、その他についても詳説しなかつた。しかし、地理的考察、人物考察をさらに明らかにすると、沙石集の叡山仏教の内容がはつきり把握されるであろう。さらに、これらの説話と他の説話集との比較をみることも必要である。これらは他日を期したいと思う。

ただ、教学の問題については仏教と文学の関係を追求しようとするため、若干意見を述べて、次の研究の参考にした。叡山教学の哲学的解説は天台学者の専門書によつて明らかはずだが、じつはほとんど理解されていないのが現実である。たとえば、叡山説話の特色の項で、ただ指摘に終つた『摩訶止観』の内容にしても、「性具ノ三千十界ノ依正、皆法身所具ノ万徳ナレバ、性徳ノ十界ヲ修得ニアラハシテ善現色身ノ誓ヲ以テ、九界ノ迷情ヲ度ス」という意味が、どの程度に現代人に理解されるかという点、今日の研究ではまったく不十分である。「人間が本来もつている善悪正邪の性質は、すべて仏の身であつてもそなえもつものだから、けがれ多い俗の身であつても、修行した悟りの姿を、仏や菩薩のよりにあらわせば、さまざま迷える人々を救える」と、この程

